

務的課題についての示唆を与えるものとなっております。より詳細な論文の内容については、『経営情報学会誌』のVol. 27 No. 1 に採録されている当該論文をお手に取っていただけますと幸いです。

2. 著者が考える本論文の貢献

本研究が今回の論文賞をいただいたことに関して、受賞理由については著者の想像の域を出ることはありませんが、著者の考える本論文の経営情報学コミュニティに対する貢献は以下の三つになります。

第一に、経営情報学の根幹ともいえるICTを用いた新しい組織形態（本論文でいうオンライン・コミュニティ）について、まだ十分に解明されていないその組織化原理（本論文ではコミュニティ内でボトムアップに生まれるリーダーシップの条件）を明らかにした点だと考えます。本稿執筆時点の2020年4月には、新型コロナウイルス発生による外出制限に端を発したりリモートワークの大幅な推進が起こっており、経営・組織運営におけるテクノロジーを介したオンライン協働がますます重要性を増しております。このような状況下、今後さらに経営情報学の社会的必要性が高まる中で、本研究がオンライン協働を理解するための一つの端緒となればと考えています。

第二に、質量共に急速に拡大するデジタル行動履歴データを元の実証研究を行った点にあると考えます。本研究では従来の質問紙調査、アーカイブ調査、フィールド調査（インタビュー、参与観察など）ではなく、近年注目の高まるdigital trace dataを活用し、コミュニティ参加者個人レベルの全行動履歴を元の実証分析を行なっています。すべての行動履歴が記録されるデジタル・プラットフォームの利点を生かし、通常のフィールド調査やアンケート調査では捉えきれない粒度・正確性を持って各参加者の行動を大規模に把握することで、オンライン協働のメカニズム把握に近づくことができたと考えております。デジタル行動履歴は今後ますます多くの研究で活用されることは間違いなく、一つの活用法を示せたのではないかと考えております。

第三に、オンライン・コミュニティ運営に対する実務的な含意を導出した点にあると考えます。本研

究から得られる示唆の一つは、コミュニティ参加者の最初期（参加開始から1か月間）の行動データを見るだけでも、その後その参加者がリーダー的存在になりうるかを予測しうることを示した点です。実際のオンライン・コミュニティ運営者にとって、コミュニティを牽引するリーダーを発掘することは非常に重要なタスクであり、早期のリーダー特定はコミュニティの持続的発展に決定的な影響をもたらします。そのようなコミュニティ運営者（=実務家）に対する具体的な示唆を提供するという点においても、本研究は一定の貢献を果たせたのではないかと考えております。

3. 査読プロセスにおける学び

本研究が経営情報学会誌の論文掲載に至るまでには、2名の匿名査読者の先生に大変丁寧かつ本質的なご指導をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

査読プロセスを経ることで、本論文は理論的にも実証的にも、論文構成や文章表現の厳密性に至るまで、数段レベルアップさせることができたと感じています。代表的なものを挙げさせていただくだけでも、用いる理論と実証アプローチの整合性、議論が適用できる範囲（バウンダリー・コンディション）の明確化、主要な構成概念をクリアに定義すること、複数の指標で変数を測ることによる分析の頑健性向上、先行研究によるサポートが不十分な主張の指摘、図表の追加による可読性向上、タイトルおよびアブストラクトの精緻化（論文内容との整合性をとる）など、論文の質向上につながる多様な点をご指導いただきました。決して敵対的・攻撃的なレビューではなく、論文を良くするための建設的なレビューであったことが印象深く記憶に残っております。査読プロセスを通して当該分野のエキスパートの目を経ることにより、自身が暗黙のうちに仮定していた説明を怠っていた部分、明瞭に意味・意図が伝わっていない文章表現、読者が理解するために必要な情報や論理展開など、数多くの改善点が浮き彫りになりました。改めて、研究をするという行為は個人的な営みでなく、社会的なコミュニティで行う営みなのだとということに気付かされました。今後経営情報学会誌および経営情報学会の大会における研

究発表および議論などにも積極的に参加し、日本の経営情報学コミュニティ全体での研究議論に微力ながら貢献することで、本査読でいただいた御恩に報いていきたいという思いを強くしました。

4. 今後の研究方向性

本論文受賞を励みに、今後も経営情報学の発展に貢献できるよう、より一層研究を推進していきたいと考えております。具体的には、大きく二つの方向性を考えております。一つ目は本研究の発展形として、知識共有オンライン・コミュニティ以外のさまざまなオンライン協働の形態について、理論的・実証的に理解を深めていきたいと考えています。例えば Wikipedia や GitHub のように大規模にオンライン協働しながら知的成果を共創していくオープンなコミュニティのケースや、一組織の中で部門や地域を超えてオンライン協働を推進していくケースなど、ICTを活用したさまざまな協働のかたちを研究していきたいと考えています。加えて二つ目の方向性として、企業レベルでのICT活用と競争力の関係性という経営情報学の本流的テーマの探究を考えております。これまでICTの雇用や産業競争力に対する影響といったマクロレベルでの研究は盛んに行われてきましたが、ミクロな組織単位でのICT活用力についての研究は途上であり、特に近年急速に重要性を増す組織におけるデータ活用およ

びアルゴリズム活用については世界的にも研究のフロンティアとして開拓途上にあります。そのような分野に対して、世界的に通用する研究を日本発で発信していきたいというのが目下の目標になります。これからも経営情報学会の皆さんと議論させていただき、ご指導いただくことで、質の高い研究を実施できればと考えております。もし同様の研究領域にご関心をお持ちの学会員様がいらっしゃれば、一緒に研究させていただけますと大変嬉しく思います。下記連絡先までご一報いただけますと幸いです。日本の経営情報学のプレゼンスを高めるために、微力ながら少しでも貢献できればと考えております。

この度は論文賞の受賞、およびこのような貴重な報告の機会をいただき、まことにありがとうございました。

略歴

清水たくみ (しみず たくみ)

takumi.s@aoni.waseda.jp

早稲田大学大学院経営管理研究科准教授。専門は経営情報学および組織論。特に技術と組織の関係性に注目し、オンライン・コミュニティ上の知識コラボレーションや、ICTを用いた組織の枠を超えるオープン・イノベーションなどを研究。慶應義塾大学卒業。McGill University 経営学博士課程。ローランド・ベルガーコンサルタント、慶應義塾大学特任助教、McGill University Instructor などを経て現職。